

## 続『おくのほそ道』における地名の虚構性

藻 谷 淳 子

### はじめに

芭蕉の『おくのほそ道』には多くの地名が登場するが、それらの地名のなかに通例使われない表記がされていたり、別の地名として表現されていたりするものがまま見受けられる。従来の注釈書ではほとんどが芭蕉の記憶違いの結果とされるか、または、さして問題にならずにきているが、前稿では「飯塚」<sup>注1</sup>「越中の国一ぶり」「封人の家」について取り上げ、それらが用いられた個所が虚構の条であり、それを示すための、意図的な地名の臚化もしくは韜晦ではないかと考えた。『おくのほそ道』にはこの他にも地名が標準的な表記と異なる場合があり、それらも芭蕉の意図的な虚構化に関連するものと思われる。本稿では、前稿につづいて『おくのほそ道』に登場する地名すべてについて検討してみたい。

### 一 地名表記のいろいろ

『おくのほそ道』に登場する地名は、国名や名所・歌枕も加えると実にたくさんある。そのうち、国名は古代から表記が定着しており、名所・歌枕は一般的にその表記の許容範囲が広く、ともに、地名表記に芭蕉の独自性を指摘しにくいものである。そこで、本稿では集落名(多くは〇〇の庄、〇〇の里と表記される)、城下町などの町名、宿駅名など、人の集まり住む場所の地名に限って考察の対象とする。

まず、『おくのほそ道』全編の該当地名を登場順に列举してみる。上野、谷中、千じゆ、早加、那須、黒ばね(黒羽)、芦野、岩城、相馬、三春、すか川、桧皮、二本松、福嶋、月の輪、瀬の上、飯塚、鯖野、桑折、白石、笠じま(笠嶋)、みのわ、岩沼、仙臺、塩がま(塩竈)、市川、平和泉(平泉)、石の巻、戸伊戸、南部、岩手、

なるご、最上、尾花澤(尾花沢)、山形、大石田、酒田、靄が岡、吹浦、一ぶり、新泻、金澤(金沢)、大坂、小松、山中、有間、大聖持、長嶋、吉崎、丸岡、福井、つるが、大垣(括弧内は再出の地名で、表記が異なるもの)の、以上五十三の地名をあげることができる。

このうち、ごく一般的な漢字表記が用いられ、問題にするに当らないものは上野、谷中、那須、芦野、岩城、相馬、三春、二本松、福嶋、月の輪、瀬の上、桑折、白石、岩沼、仙臺、市川、石の巻、南部、岩手、最上、尾花澤(尾花沢)、山形、大石田、酒田、靄が岡、吹浦、新泻、金澤(金沢)、大坂、小松、山中、長嶋、吉崎、福井、大垣の三十五である。

平仮名あるいは漢字平仮名混じりは、中世・近世の紀行文学ではよく見かけられる表記で、千じゆ、黒ばね、すか川、笠じま、みのわ、塩がま、なるご、一ぶり、つるがの九個所である。このうち、黒羽、塩竈、笠嶋の三箇所は漢字でも書かれていることから、表記上の変化をねらったものと考えられる。みのわは『旅日記』に「三ノ輪」と表記されており、これを平仮名にしてみのわ笠嶋と組み合わせ、折からの五月雨の季節にふさわしい地名であると興じた場面に登場する。一ぶりについては前稿で検討したので詳細は省くが、越後の国市振であるはずの地名を越中の国の一

ぶりであると表現することで、現実には存在しない土地として作品上に登場している。

残る四箇所は千じゆ、すか川、なるご、つるがである。これらは難読地名に類似しており、千住をセンジュウ、須賀川をスガカワ、鳴子をナキゴ、敦賀をアツガと読み間違える可能性がある地名と考え、平仮名を選んだと思われる。氣比明神をけいの明神と表記したのと同様の考え方であろう。また、瀬の上、石の巻のごとく、「の」を挿入するばあいがあり、これは国名を出羽の国、越後の国などと表記するのと同様で、習慣的用法と考えてよいであろう。飯塚については前稿で取り上げ、よく似た地名を用いた韃靼であったとした。

さて、早加、松皮、鯖野、平和泉、戸伊戸、有間、大聖持と、松岡を丸岡と表記した八箇所は芭蕉の意図的な変更と考えられる。これらについて、以下詳しく検討してみたい。

## 二 早加

早加は草加と書くのがふつうである。草加は日光街道の江戸から二番目の宿駅で、千住と越谷の間にある。陰暦三月二十七日の早朝、主人公「予」<sup>注4</sup>と曾良は、かねてから志していた『おくのほそ道』の旅に出発した。飯富先の杉風の別墅をあとに、門人知友

に舟で見送られ、千じゆで舟から上がって改めて別れの挨拶を交わしたあと、本文ではつぎのように書かれている。

#### 行春や鳥啼魚の目は泪

是を矢立の初として、行道なをす、まず。人々は途中に立たびて、後かげのみゆる迄はと、見送なるべし。

ことし元禄二とせにや、奥羽長途の行脚、只かりそめに思ひたちて、呉天に白髪を恨を重ぬといへ共、耳にふれていまだめに見ぬさかひ、若生て帰らばと定なき頼の末をかけ、其日漸早加と云宿にたどり着にけり。

瘦骨の肩にかゝれる物先くるしむ。

旅行中の日程や出来事などを、曾良が詳しく記した『曾良旅日記』（以下、『旅日記』と略記する）によると、第一日目の記録は「カスカベニ泊ル。江戸ヨリ九里余」とある。草加は千住から二里八町、江戸からは四里余り、旅慣れた人なら一日十里は歩く時代であるから、主人公たちがここでまず第一夜を明かしたというのはあまりにも近すぎるようである。

曾良の『旅日記』にある事実のとおり粕壁（現在は春日部と表記する）と記さずに、より江戸に近い草加にした理由については、記憶違いとする説<sup>注5</sup>、俳諧的な表現で草臥<sup>さうぐわ</sup>に響かせたとする説<sup>注6</sup>、また、尾形竹氏<sup>注7</sup>のように、「人々との別れを惜しみ、肩にした荷の

重さに苦しみつつ進めた旅の第一日の歩みのたどしさを強調するためのフィクションに出たものといわなければならない」とする考えもある。これらの諸説では、早加は「草加」の表記違いであることが前提となっている。

草加の歴史はそれほど古いものではなく、慶長から正保年間に綾瀬川・毛長川などの流域の、低湿地帯の開鑿で急速に開けた村々の一つであった。<sup>注8</sup>寛永五年（一六二八）の「御鷹場五箇条制札」（『東武実録』内閣文庫蔵<sup>注9</sup>）には「そつか村」「やかう村」の名が触村としてあげられている。それより以前の慶長十九年（一六一四）、出羽の国秋田藩の重臣が「さうか」に宿泊している<sup>注10</sup>ので、そのころから宿の機能があったが、寛永年間（年次は特定できない）に願い出て、南草加村・北草加村・矢古宇村など九か村で構成される、日光街道・奥州街道の公的な宿駅となったとされている。<sup>注11</sup>

また、草加の地名の由来は諸説あり、<sup>注12</sup>「草加市史研究」（創刊号、一九八一年、草加市）によれば「その地形から考えて、日下部とか日下から転じたものというよりも、綾瀬川、毛長川などによって形成された砂地の低湿地帯であったことと、そのために草の生い繁るところから付けられた地名ということができよう」とあり、これが通説と考えてよいようである。「日下部説」「草生い繁る説」いずれを採るにしても、早加では意味が通らない。鴻池村徑の『お

くのほそ道鈔』<sup>注13</sup>には「早加はむかしの文字にて書ると当時は草加と書るよし」とあるが、「むかしの文字」には何か根拠があるのであるうか。菅見ではあるが、近世の紀行類を調べてみても、見当たらない。<sup>注14</sup>

芭蕉はなぜこのように前例の見当たらない早加という表記を用いたのであろうか。『おくのほそ道』の導入部分は、まず、物狂おしいほどの漂泊願望に始まる。そして、いざ旅立ちという段になると厳しい旅の前途を思つてやや心細くなり、門人知友との別れの涙にくれ、心が重く足がはかどらない。いつの世にも、だれしにもありがちな旅立ちの心理状態が巧みに描かれる。その気持ちに反映させるためには、一部舟を利用したとはいえ、第一目目に江戸から九里（千住からは七里）の粕壁まで行つたのでは、はかどりすぎである。

芭蕉はそこで、虚構の宿泊地として、より近い宿場である草加を選んだが、現実の里程を考えるとあまりに大げさすぎると気づく読者に対し、草加ではなく早加と表記することで、日程的に不自然であるが、それを承知で記述したという意思表示をしたのではないだろうか。また、「其日漸早加と云宿にたどり着にけり」と、ようやくたどり着いたのが、皮肉にも「早く加わる」という所であつたという俳諧的滑稽の一面もある。草加より一里二十丁先の

越谷とすればそのような面白味には欠けるであらう。さらに、たどりついたとあるだけで、宿泊したと書かれてはいないところも、早加の表記とともに、はつきりといわずに臙化しようという意志ともとることができる。

つまり、早加の表記は間違いではなく、日程的に不自然な虚構の宿泊地であることのしるしとして、芭蕉が意図的に表記したものであり、俳諧的な効果をも期待した表現であつたと思われる。

### 三 桧皮

等窮が宅を出て五里計、桧皮の宿を離れてあさか山有。路より近し。此あたり沼多し。かつみ刈比もや、近うなれば、いづれの草を花かつみとは云ぞと、人々に尋侍れども、更知人なし。沼を尋、人にとひ、かつみくゝと尋ありきて、日は山の端にかゝりぬ。二本松より右にきれて、黒塚の岩屋一見し、福島に宿る。

桧皮の宿は日和田宿のことで、奥州街道に設置された宿駅である。近世以前は部屋田、部谷田、部和田、辺和田、戸谷田、比谷田などと表記され、ヘヤダ、ヘワダ、ヒヤダと発音されていた。桧皮の表記は先行文献には見当たらない。『和漢三才図会』や、十辺舎一九の『金草鞋』には桧皮とあるが、『おくのほそ道』の板行

より後の作品であり、『おくのほそ道』に影響されているとも考えられる。また、『和漢三才図会』の地名表記は自由奔放の趣があるので、ここにあるからといって普通に用いられていたとは言いがたい面がある。したがって、日和田宿を桧皮の宿と表記するのは、芭蕉当時には一般的でなかったとして間違いないであろう。

『旅日記』では、この日は次のように始まっている。

五月朔日 天気快晴。日出ノ比、宿を出。壹里半来テヒハダノ宿、馬次也。町はづれ五、六丁程過テ、あさか山有。壹里塚ノキハ也。

ここでは、日和田は片仮名で書かれているため、ヒワダと発音するつもりで書かれたのであろうが、ヒハダとも発音できて紛らわしい書き方である。

曾良は『旅日記』の中でハとワを発音によって区別して用いていないようである。例えば、ハと発音するものは「町はづれ」「町ハヅレ」「ソレヲ渡レバ」など、ワと発音するものは「壹里塚ノキハ也」「黒塚ハコレナラン」「杉植し所は」「わらぢ二足」「ハラジヌギカエ」などがあり、<sup>注15</sup>ほとんど無秩序状態である。

芭蕉が『おくのほそ道』の執筆にとりかかったのは、旅行後三年近く経過してからである。記憶だけを頼って書くことは不可能であったはずだ。自分自身で作っていた簡単なメモなどはあった

にしても、おそらく曾良が詳しく記録していた『旅日記』を参照したことは間違いあるまい。「ヒハダノ宿」をヒハダとそのまま発音し、桧皮の字を考えつくのはたやすいことだろう。

では、日和田を桧皮と表記した理由をさらに考察してみよう。

先に引用した本文と、『旅日記』の該当部分を読み比べてみると、  
「等窮が宅を出て五里計、桧皮の宿を離れてあさか山有」と本文にはあるが、『旅日記』には郡山の宿を日の出のころに出て「壹里半来テヒハダノ宿：町はづれ五、六丁程過テ、あさか山有」と記録され、まず、その距離に大幅な違いがある。実は須賀川の等窮の家を辞したあと、翌日は郡山の宿に一泊しており、その宿を出たのが日の出のころであった。

さらに、本文には「此あたり沼多し。かつみ刈比もや、近うなれば、いづれの草を花かつみとは云ぞと（中略）尋ありきて、日は山の端にかゝりぬ」と、五里ばかり歩いたあとの午後は花かつみを捜し歩き、とうとう日暮れ近くなったとある。『旅日記』によると、事実としては、安積山・浅香沼・山の井などの歌枕をたどったあと、二本松からそれで鬼が籠っていたという伝説がある歌枕の黒塚を見物したり、福島の手前の郷野目村で知人を尋ねたりとあちこち寄り道をして日没前に福島に着き、宿をとっている。郡山から福島まではJRの在来線を使っても四六・一キロメートル

ルあり、寄り道をして行つた芭蕉たちは、日の出から日暮れ前までに、それよりも多くの距離を歩いたことになる。実際に花かつみを捜し歩くようなゆとりはなかったはずである。<sup>注16</sup>

また、曾良は、浅香沼はほとんど田になり、あたりの谷にも田があるが、「昔」はみな沼だつたろうと推測している。つまり、「此あたり沼多し」という本文は現状をいうのではなく、「昔」に旅しているような設定になっているのである。したがって、この条は櫻井武次郎氏が説く<sup>注17</sup>ように、古典の世界を旅している典型的な条の一つであるといえよう。

江戸中興期の芭蕉研究家蓑笠庵梨一は、『奥細道菅菰抄』<sup>注18</sup>で見出しの松皮に「ヒワダ」とルビをし、「松皮は、本字日和田なり、こゝは洒落にて、松皮と書かされにしや」と述べている。蓑笠庵梨一のいうごとく、芭蕉は日和田という面白味のない表記を避け、松皮ぶきの家々がしつとりと立ち並ぶ中世の宿場町の俳をしのばせる松皮という表記を用いた。当時の日和田宿は相当繁華で、遊女もいた宿場町であつた。<sup>注19</sup>しかし、事實は色黒の遊女や、たたらを踏む女がいたというお世辞にもしつとりとはいえない陸奥国の宿場町であり、それを承知のうえ、滑稽味を帯びた俳諧的遊び心で表現したのである。梨一が疑問のかたちながら問いかけているのは卓見ともいふべきであらう。

松皮という表記は、地理的、日程的に無理な虚構の条であることの暗示であると同時に、俳諧的な表現であると考えられる。

#### 四 鯖野

鯖野については前稿で一部取り上げたため、記述が重複する部分があることをお許し願いたい。『地名辞典』<sup>注20</sup>によれば、中世には佐葉野と記されていた。近世以来明治九年に合併して村名が変更されるまで、佐場野村の表記が通例であつたが、現在は福島市飯坂町平野字鯖野として小字名に残されている。

月の輪のわたしを越て、瀬の上と云宿に出づ。佐藤庄司が旧跡は、左の山際一里半計に有。飯塚の里鯖野と聞て尋く行に、丸山と云に尋あたる。是庄司が旧館也。麓に大手の跡など、人の教ゆるにまかせて泪を落し、又かたはらの古寺に一家の石碑を残す。中にも二人の嫁がしるし、先哀也。(中略)寺に入て茶を乞へば、爰に義経の太刀・弁慶が笈をとめて什物とす。

笈も太刀も五月にかざれ帟幟

五月朔日の事也。其夜飯塚にとまる。温泉あれば、湯に入て宿をかる

飯塚の里鯖野と書かれているが、飯塚も佐場野も実は当時は独

立した別の村で、二つの村は約二キロメートル（以下、本項目での距離はすべて地図上で計った直線距離）離れている。『旅日記』によれば、五月二日、芭蕉たちは飯塚村を通らずに瀬の上から直接佐場野へ向かう。瀬の上から佐場野までの距離は五・五キロメートル。本文と『旅日記』に、道のりで一里半とあるのにはば一致する。佐場野の医王寺を訪れて、さらに（一キロメートル先の）大鳥城跡（佐藤庄司の旧跡）を見物、（東へ折れて一キロメートル歩いて）飯坂温泉に宿泊したと記録される。

実在の飯塚村については当時の道路状況は不明である。「幕末明治日本国勢地図・輯製二十万分一図」（明治十九年）によれば、瀬上から佐場野への道はあるが、瀬の上から飯塚（明治十九年現在、合併で平塚村となっている）へ直接行く道は記載されていない。幕末の地図にない道が、元禄時代にあったとは考えにくいのではないだろうか。したがって、この点からも芭蕉主従は間違いなく飯坂に泊まったのである。

『おくのほそ道』では飯塚村鯖野の丸山に佐藤庄司の旧館（大鳥城）があり、その傍らの古寺（医王寺）に一家の石碑など、関連の品々があるように書かれているが、佐場野にある医王寺には佐藤庄司夫妻の墓があり、「義経の太刀・弁慶が笈」ではなく、義経のものといわれる笈、弁慶が書いたという般若経が宝物として

収蔵されていた。<sup>注21</sup>「二人の嫁がしるし」に該当するものはなく、『旅日記』の翌三日の項に、白石の手前で「次信・忠信が妻ノ御影堂有」と記されるものがそれであろうといわれている。<sup>注22</sup>

「庄司が旧館」大鳥城は医王寺からさらに約一キロメートル北であるから、医王寺を見物したあとにそこへ向かったはずであるが、本文の順序は「庄司が旧館」を見物したあと、「かたはらの古寺」へ赴いたように逆に書かれている。また、飯塚に本文に記されているような温泉があったとすれば、飯塚村は大鳥城から約三キロメートル南にあるために、後戻りせねばならない。飯坂温泉は次の通過地桑折に向かう途中にあり、ここに宿泊するなら地理的にも無理はない。

このように、佐藤庄司関連をすべて佐場野にあることにしたり、古寺（佐場野の医王寺）収蔵の宝物を発句に合せて都合よく脚色したり、日付を変更したりしたのは虚構である。その事実を暗示するために、芭蕉は、佐場野を鯖野と表記したのではないだろうか。

飯坂を飯塚にした理由については、前稿で述べたとおりである。

## 五 平和泉

十二日、平和泉と心ざし、あねはの松。緒だえの橋など聞伝

て、人跡稀に雉兔葛藟の往かふ道そこともわからず、終に路ふみたがえて、石の巻といふ湊に出。(中略)宿からんとすれど、更宿かす人なし。漸まどしき小家に一夜をあかして、明れば又しらぬ道まよひ行。(中略)戸伊戸と云所に一宿して、平泉に到る。其間廿余里ほど、おぼゆ。

ここでは、同じ地名を少し離れた所で平和泉、平泉と二通りの漢字表記にしてある。平和泉は通例では平泉と表記される。『地名辞典』記載の史料類もすべてこの平泉の表記である。<sup>注23</sup>

この条は歌枕を意識しながら探しあぐねつついくうちに、道を間違えて港町石の巻に到着したが、そこでは港が繁栄を極める一方で人情は衰微しており、一泊のあと、また歌枕を次々とよそに見ながら迷いつつ出て行くという構成になっている。この条は十二日という日付を含めて全体的に虚構であるが、中心になる石の巻を虚名にしなかったのは、石の巻周辺の繁栄と人情の衰微が事実であったからである。<sup>注24</sup>しかし、瑞巖寺から平泉に行く道はそれほど複雑ではなく、石の巻前後の迷い道は明らかに虚構である。それを示すために初めの「心ざし」た地名は平和泉とし、迷い迷った苦勞の末に到着したのは間違いなく平泉であったとしたのであろう。

本文ではのちに平泉にある「和泉が城」が登場するのであるが、

それにあやかってここは平和泉と表記したと考えるもよいのではないだろうか。

## 六 戸伊戸

戸伊戸の表記は『おくのほそ道』の諸本(芭蕉自筆本、曾良本、西村本、柿衛本)に記されているが、一般的な注釈書では「戸伊摩」と翻刻されている。<sup>注25</sup>古代から地名の漢字表記は登米であり、現在はトヨマと発音するが、郡名としてはトメと読む。古くはトヨメ・トイマともいい、『旅日記』には「戸いま」「戸今」と記録されていることから、当時現地ではトイマと呼ばれていたらしい。曾良は漢字がわからなければ仮名で書くという原則で、現地での発音を忠実に記録したらしく、他の土地でも頻繁に仮名書きが見られる。

漸まどしき小家に一夜をあかして、明れば又しらぬ道まよひ行。袖のわたり・尾ぶちの牧・まの、萱はらなどよそめにみて、遥なる堤を行。心細き長沼にそふて、戸伊戸と云所に一宿して、平泉に到る。其間廿余里ほど、おぼゆ。

『旅日記』では石の巻から登米までは長い沼があった、渡しが二つあったなど淡々と記録される。しかし、「戸いま」に着くと紹介状があったらしい宿に宿泊を断られたため、検断の庄佐衛門に



話をつけて宿泊したとあり、多少嫌な思いをしたようである。この経験が石の巻の「更宿かす人なし。漸まどしき小家に一夜をあかして、明れば又しらぬ道まよひ行」に反映したのであろう。<sup>注26</sup>また、翌日は登米を出発し、夕暮れに一関で合羽も通すほどの大雨にあって泊り、翌日の好天に平泉に到るというのが事実であったが、本文では一関のことはすべて割愛されている。

戸伊戸と表記されたのは、平和泉の表記と密接な関係があるように思われる。主人公たちは瑞巖寺から平和泉へと向かったが、その折は歌枕の地をさまよいながらの道行きであった。途中、思いがけず石の巻に迷い出て、ようやくの思いで貧しい人の家に泊めてもらい、翌日、また心細い思いをしながら迷い迷い歌枕をたどって戸伊戸に泊り、翌日目的地の平泉にたどり着いた。つまり、本文上の平和泉と戸伊戸の間は歌枕に始まり歌枕に終わる虚構の旅であり、平泉に着いて初めて現実の世界に戻るということを示すのが、ともに漢字三字で表記される平和泉と戸伊戸であったと思われる。

## 七 大聖持

大聖持の城外、全昌寺といふ寺にとまる。猶加賀の地也。曾良も前の夜此寺に泊て、

### 終宵秋風聞やうらの山

と残す。一夜の隔千里に同じ。吾も秋風を聞て衆寮に臥ば明けぼの空近う読経声すむまゝに、鐘板鳴て食堂に入。けふは越前の国へと、心早卒にして堂下に下るを、若き僧ども紙・硯をかゝえ、階のもとまで追来る。折節庭中の柳散れば、

### 庭掃て出ばや寺に散柳

大聖持は通例大聖寺と表記される。「奥細道菅菰抄」には「大聖持は、大聖寺と書くべし。もと寺の名にて、今地名となる。（俗は或いは大正寺とも書）」とあり、『旅日記』には「大正侍二趣。全昌寺へ申刻着」と記されている。<sup>注27</sup>『地名辞典』では戦国時代の文書に一部「大正持」の表記がある。板坂元・白石悌三『おくのほそ道』（講談社文庫）の補注によれば、「大正持」は加賀藩関係の史料に頻出する表記であるという。また、寺を持と書く例は江戸時代にはほかにも多かつたらしく、<sup>注28</sup>したがって、大聖持はこれまで検証してきた地名に比べて、より一般的な書きかたであるといえよう。この条は、山中で曾良と断腸の思いで別れる場面が続いており、別れた曾良に対する情がしみじみと感じられるところである。読者は、主人公が一人取り残されて、旅愁に浸りながら旅の続行に心急ぐと錯覚するのであるが、まもなく丸岡天竜寺の条で、金沢以来実は北枝が同道していたことが知れる。また、曾良は『旅

日記』によれば、全昌寺に八月五日と六日の二晩泊まっているのが事実で、芭蕉が泊ったのは七日・八日の二泊とか、九日だけとかの説があり、確定していない。<sup>注29</sup>この個所は虚構とまではいえませんが、永らく同行していた腹心の弟子と別れなくてはならなかった寂しさ、旅も終りに近づいて先を急ぎたくなる心情などが、少しばかり誇張されて表現されているのである。

ただ、それだけの理由で表記を変える必要があるとは考えにくい。ひるがえって、「大聖寺」の城外、全昌寺といふ寺にとまる」とした場合を考えると、わずかな間に寺という字が二度も出る。これを避けるために大聖持という表記が選ばれたとも考えられ、芭蕉の意図的な虚構によるものとは直接関係がないとしていいであろう。

## 八 丸岡

大聖持を急いで出発した主人公は、加賀と越前の境にある吉崎から船に乗って、歌枕の「汐越しの松」を訪ねたあと、次のような条となる。

丸岡天竜寺の長老、古き因あれば尋ぬ。又、金沢の北枝といふもの、かりそめに見送りて、此処までしたひ来る。(中略)  
五十丁山に入て、永平寺を礼す。

従来、丸岡は天竜寺のある松岡の間違いとされてきた。<sup>注30</sup>丸岡は福井県坂井郡丸岡町で、吉崎からは約二十キロメートル南下した地点にある。さらに八キロメートル南下すると、松岡があり、現在には福井県吉田郡松岡町である。元禄二年当時、松岡天竜寺の長老(住持)は大夢和尚で、もと、江戸品川の天竜寺の住持であったという説もあること<sup>注31</sup>から、あるいは芭蕉と交遊があったかとも推測されている。また、永平寺に行くには、松岡から左に折れて山に入るので、この点でも芭蕉が宿泊したのは丸岡ではなく松岡に間違いないだろう。

しかし、これまで検討してきたように、芭蕉は単純に地名を間違えたことはなかった。ここも、よく似た地名が近くにあることを利用し、わざとそちらに宿泊したと宿泊地を臆化しているのではないだろうか。

『おくのほそ道』では、個人的な縁で社会的に地位のある人に親しさを表現した場合や、訪ねていき宿泊などの世話をかけた場合には、その相手があまりあからさまにならないように配慮し、匿名が使用されている。たとえば、「黒羽の館代浄坊寺何がし」は、浄法寺図書高勝のこと、「其弟桃翠」は俳号翠桃の鹿子畑豊明のこと、「蘆野郡主戸部某」は芦野民部資俊のこと、「すか川の等窮」は須賀川で駅長をつとめていたといわれる等躬のことを指すなど<sup>注32</sup>

である。

天竜寺の場合、長老というだけで名を明記してないとはいえ、世間には「松岡天竜寺の長老」で充分通用していた人と思われ、地名を韜晦することで匿名性がよくやく確保される場合なのではないだろうか。僧侶のばあい、〇〇寺の住職あるいは和尚などで通用していて、本名はあまり世間に知られていない場合が多い。丸岡の天竜寺とすれば、事実を知っている人ならば芭蕉の意図に気づくはずであろう。

## 九 有間

有間は有馬温泉のことである。テキストに用いた西村本では、山中温泉の条で「其功有明に次と云」と記されているが、清書者素龍が「有間」を書写違いしたものである。自筆本も曾良本も「有間」、柿衛本は「有馬」とする。有間も異例の表記であるが、これまで取り上げた例と違い、古代（『日本書記』など）の表記法である。実際にこの旅行で足を踏み入れた場所ではないうえ、『おくのほそ道』の旅とは全く関係ない方向の地名であり、古代の表記を用いることで俳諧的に洒落た表現にした部分と思われる。

## 一〇 日光と那須野など

日光の条では日付や旅の順序、仏五左衛門の人物造形、那須野の条では「野越え」が虚構である。そして、日光も那須野も宿泊した宿駅名が記載されていないことが注目される。

日光では『旅日記』の四月朔日の条に「上鉢石町五左衛門ト云者ノ方ニ宿」とあるにもかかわらず、本文では「卅日、日光山の禁に泊る」とし、宿泊した上鉢石の名を明記しない。那須野の場合も『旅日記』には「同晩（四月二日。筆者注）玉入泊。宿悪故、無理ニ名主ノ家ニ入りテ宿カル」とあるにもかかわらず、本文では「遙に一村を見かけて行に、雨降り日暮る。農夫の家に一夜をかりて、明ければ又野中を行」と宿泊地がうやむやにされ、玉入泊りを明記していない。宿泊したと述べながら宿場の名を明記しないのは『おくのほそ道』の中でほかに、前稿で述べた堺田の庄屋に宿を借りた個所があるのみである。したがって、これも虚構を暗示する方法の一種であると見られる。

福井の等哉（実は洞哉または等哉）を訪れた条は『源氏物語』夕顔の巻のパロディであり、虚構であることはよく知られている。この場合は登場人物の名を偽名にすることが虚構のしるしとなっている。

## 一一 中世と近世の一般的地名表記

『芭蕉自筆奥の細道』では、「左りに会津根高く右に岩城相馬箕張の庄常陸下野の地をさかひて山つらなる」とあるなかに、箕張という見慣れぬ表記が一箇所ある。いうまでもなく「三春」が正しいのであるが、これは曾良本では修正ではなく初めから正しく書かれている。この事実は、芭蕉が創作していく課程での心境の変化を表しているものと思われる。箕張という表記は『おくのほそ道』より古い資料には現れず、まさに俳諧的で、面白味をねらったと思えない。しかし、それだけのことで、この本文ではほかに何の効果ももたらすものではない。

地名以外の漢字では『おくのほそ道』にもたくさんの略字や当て字があるが、江戸期の漢字表記では、略字や当て字が使用されるのは一般的なことである。『おくのほそ道』では、草稿の段階では、俳諧としての紀行文を意図して面白味のある表記を用いていたが、推敲を重ねるにつれて、少なくとも地名だけは通例のものに変更されていたと考えられないだろうか。箕張の存在はそんな可能性をも示しているように思われる。

中世や近世の他の紀行作品に登場する地名はどのように表記されるかをみると、まず、芭蕉が『おくのほそ道』を書くに当たつ

て大いに参考にしたとされる『東関紀行』では、大体が一般的な表記を用いており、例外として矢矧を矢矧、豊川を豊河、由比ヶ浜を湯井の浦とした三個所のみが現代と異なる書き方である。『海道記』も全く同様に矢矧、豊河、湯井の浦と表記されることから、この三つは中世の慣習的な地名表記であると考えていいであろう。

その他の紀行類では掛川を懸川、川崎を河崎とするなど、慣例として存在する範囲の異同や、仮名表記がとられている。つまり、紀行文は伝統的に慣習に沿った地名表記が用いられてきているとみられる。

### おわりに

本稿では、前稿と合せて『おくのほそ道』に出てくる地名のうち、名所・歌枕として登場するものと国名を除いたものすべてについて、地名が虚構化されていないかどうかを、表記を取り掛かりにして検討してみた。

該当地名五十四のうち、一般的とみられる漢字表記は三十五であった。平仮名あるいは漢字平仮名まじりは九つあって、そのうち一ふりのみが虚構化されており、他の八つはすべて平仮名表記を使う理由のあるものであった。さて、残った漢字表記の十の地

名のうち、大聖持と有間は歴史上ありえない表記ではなく、あとの八つに「一ぶり」を加えた九つの地名は例外なく他の資料にない表記またはよく似た別の地名であり、地理的、目的、あるいは内容的に事実と異なる虚構の条や、匿名性の確保に用いられているようである。また、宿泊地を明記しない、したがって右の数字に表れない三箇所も虚構の条であった。

いっぽう、黒羽に滞在していた十三日間のこととは日程や順序が適当に変えられており、『旅日記』と照らし合わせてはじめて、それらが事実と異なることが判明する。同様に、須賀川の滞在日数や山中と那谷寺の順序など、旅の事実と異なる箇所はいくつかあるが、これらの場合、地名は虚構化されていない。おそらく一般的な旅にありうる無理のない行程で描かれているからであろう。ということは、同じようなルートを旅した者が『おくのほそ道』を読んだときに、虚構化が著しくて疑問に感じるかもしれない個所についてのみ、芭蕉は地名をも虚構化しているといえるのではないだろうか。

重ねていえば、従来芭蕉の思い違いや記憶違いによる間違いとされていた地名表記が、実は意図的な書き換えで、一見疑問に思われるような地名が記されるのは、地名を韜晦する意味のある個所に限られているようである。また、みてきたように、虚構化さ

れた地名の表記に本来の地名からつかず離れずの俳諧化が見受けられる点からも、芭蕉は紀行文の伝統にのっとって、地名の扱いについてはむしろ非常に慎重で、できるかぎり正確な地名を用いるよう心がけるよう苦心していたように思われるのである。

#### 注

注1 「『おくのほそ道』における地名の虚構性」(『東京女子大学日本文学』第八十九号一九九八年三月)

注2 伊達政宗の最初の居城があった岩出山のことを指す。『旅日記』もこの表記をしており、芭蕉主従は歌枕の岩手と混同していたらしい。

注3 みのわは二度出る。曾良本『おくのほそ道』は二度ともみのわと表記され、西村本『おくのほそ道』は二度目には蓑輪笠鳴と漢字に変えてある。『福島県の地名』(日本歴史地名大系)にはミノワに該当する地名がなく、金沢規雄『おくのほそ道』をたずねて』所載の「元禄年間制作仙台領内絵図」にもないことから、村名ではなく小字名であろうとされており、正確な地名表記は伝わらない。

注4 「『おくのほそ道』では芭蕉によく似た主人公が「予」と名乗っているだけで、芭蕉という名は一度も登場しない。芭蕉の旅の事実と一致しない行動が多いため、近年は「主人公」と表現されることが多

い。

- 注5 井本農一『おくのほそ道をたどる(上)』(角川文庫昭和五九年)
- 注6 志田延義『奥の細道評釈』(昭和三十一年武蔵野書院)
- 注7 額原退蔵・尾形仿『新訂おくのほそ道』(角川文庫平成元年版)
- 注8 『角川日本地名大辞典埼玉県』(角川書店)
- 注9 『埼玉県の地名』日本歴史地名大系(平凡社)
- 注10 『梅津政景日記』(『埼玉県の地名』日本歴史地名大系平凡社による)
- 注11 注5に同じ。
- 注12 『草加市史研究』創刊号(草加市一九八一年)、『草加の歴史』(草加市一九六三年)
- 注13 鴻池村徑『おくのほそ道鈔上』『奥の細みち鈔下』(宝暦庚辰春奥書)
- 『国文学解釈と鑑賞』昭和三十三年三月号の翻刻による。
- 注14 井原西鶴『一目玉鉾』(元禄二年刊・定本西鶴全集第九卷)には、「草賀」と表記される。
- 注15 近世の文学者の多くは仮名遣いにあまりこだわらない。
- 注16 注5の書、一一一ページ参照。
- 注17 櫻井武次郎『『おくのほそ道』の方法』(『日本古典の眺望』桜楓社平成三年)に、主人公達は千じゆを出発し大垣に到着するまで、古典の世界を旅行しているのだという考え方が述べられている。
- 注18 岩波文庫『芭蕉おくのほそ道』所収の翻刻による。
- 注19 『福島県の地名』日本歴史地名大系(平凡社)によれば、日和田は中世から鑄物業が盛んで、元禄期の『東鄙草』に「たたら踏む女」とか「女郎衆を鍋の額も色黒さよ」などと記されているという。
- 注20 『福島県の地名』日本歴史地名大系(平凡社)、『角川日本地名大辞典福島県』(角川書店)
- 注21 『旅日記』に「寺ニハ判官殿笈・弁慶書シ経ナド有由」とあり、『陸奥衛』『奥羽観跡聞老録』にも同様の記述がある。
- 注22 井原西鶴『一目玉鉾』巻一(定本西鶴全集第九卷)に「甲冑堂は佐藤庄司が二人の子次信忠信が女の御影、鎧を着し、むかしを今に、其姿を木造に移し置きぬ」とある。
- 注23 井原西鶴『一目玉鉾』巻一に「平和泉」と表記される。「草賀」と同様めでたい文字を使った洒落であろう。
- 注24 注1の論文に詳しく論じたので参照していただきたい。
- 注25 阿部喜三男・久富哲雄『詳考奥の細道増訂版』(日栄社昭和五四年)と、上野洋三編『新注絵入奥の細道曾良本』(和泉書院一九八八年)の二本が戸伊戸と表記する。
- 注26 井本農一『芭蕉』鑑賞日本古典文学(角川書店昭和五〇年)、額原退蔵・尾形仿『新訂おくのほそ道』(角川文庫平成元年版)
- 注27 『角川日本地名大辞典石川県』(角川書店)、『石川県の地名』日本歴史地名大系(平凡社)に『昔日北華録』からの引用がある。

注28 講談社文庫本に加え、杉浦正一郎『校註奥の細道』参照。

注29 殿田良作「芭蕉研究三」は七日、八日の二泊、石川銀栄子「越前俳諧叢書二」は九日一泊とする。

注30 『菅菰抄』に「天竜寺は禅宗にて、福井の西、松岡といふ所に有（本文に丸岡といふは誤なり）」と記されて以来、例外なく芭蕉の記憶違いまたは書き間違いとされている。

注31 『校本芭蕉全集第六巻紀行・日記編』（井本農一編、富士見書房平成元年版）に注記される。その他諸注では、江戸品川の天竜寺にいたかどうかは未詳とする。

注32 村松友次「『おくのほそ道』登場人物の虚名」（『俳文芸』創刊号、昭和四八年一月）

注33 『中世日記紀行集』新編日本古典文学全集（小学館一九九四年）の十編と、『近世紀行集成』叢書江戸文庫一七（国書刊行会一九九一年）のうち「壬申紀行」、津本信博編著『近世紀行日記文学集成二』（早稲田大学出版部平成五年）のうち「吾妻紀行」、『東路記』新日本古典文学大系（岩波書店）、『日記紀行集全』（有朋堂文庫昭和二年）を参照した。

付記 本文および『曾良旅日記』の引用は、前稿に同じく岩波文庫版『芭蕉おくのほそ道』により、地名表記は、曾良本『おくのほそ道』の写真版（村松友次『曾良本「お

くのほそ道』の研究）付載笠間書院昭和六十三年）によった。『旅日記』の細かい仮名遣いについては、天理図書館善本叢書第十巻『芭蕉紀行文書』所収の『曾良旅日記』で確認した。

（もたに じゅんこ 一九八八年修士課程修了）